

バイオリン

温度・湿度管理を徹底！

木材は乾燥すると縮み、湿気を吸うと膨らむ。バイオリンもギターと同様、湿度と温度による影響を受けやすい。バイオリンケースには温度計と湿度計が付いているものもあるが、ない場合は湿度計だけでも入れておくといよい（湿度計はケースにしっかり固定して、楽器に当たらないように注意）。

屋外での使用には――

屋外は気温や湿度の変化が激しく、また、長時間直射日光に当たるとバイオリンが変形してしまう可能性も。屋外での演奏が多い方は、環境の影響を受けにくいサイレントバイオリンを検討してみては？

サイレントバイオリンSV250

加湿器は「ハイブリッド式」「気化式」を

加湿器は、加湿方法の違いで「超音波式」「スチーム式」「ハイブリッド式」「気化式」の4つのタイプがある。ピアノに適しているのは、水を浸透させたフィルターに温風（または風）を当てて気化させながら加湿する「ハイブリッド式」と「気化式」。「超音波式」と「スチーム式」は湯気が結露する場合があるので避けよう。

室温や湿度の急激な変化、加湿のしすぎに注意

ヤマハのピアノは製造工程において、出荷する国の気候に合わせて木に含まれる水分量（含水率）を調整するなどの処置をとっており、通常であれば過度に気温や湿度の影響を気にする必要はない。しかし、加湿器で湿度を高くしすぎたり、室内の温度や湿度が急激に変わって結露が起きると不具合が生じることがあるので注意が必要。

ギター

温度・湿度管理を徹底！

ギターは湿度と温度による影響を受けやすい楽器で、乾燥と高温多湿は厳禁。保管時はケースにしまい、45～55%の湿度を保てるよう、加湿器やエアコンで適宜調整を。直射日光やエアコンの直撃も悪影響を及ぼすので要注意。ネックの反りやブリッジの割れといった重度の症状は修理が困難なため、調子が悪いと感じたら早めに楽器店へ相談を。

ピアノ

コルクをチェック

湿度の高い時期は、ジョイント部のコルクが膨らんで管がうまく入らなくなることが。コルクグリスをしっかりと塗って組み立てよう。ただし、塗り過ぎには注意。また、コルクは劣化する前に定期的に交換を。

管の中の湿気対策

木製管体の割れは、湿度の急激な変化によっても起こる。湿気への対策としては、管の中の水分を吸収して内部の変形を防ぐ「ボアオイル」がある。



ボアオイルB02
（クラリネット、
オーボエ、
ファゴット用）
671円（税込）

ボアオイルの正しい
使い方【クラリネット】



木管楽器

使う前に楽器を温める

冬は冷たい外気や室温によって楽器が冷え、木製の管体は収縮する。そこに息を吹き込むと、管の中の温度が一気に上昇し、木は外へ膨らもうとする。しかし外側は低温によって収縮しているので、この急激な変化のためにヒビが入ってしまうことが。

ケースから出した楽器が冷えていたら、楽器全体が温かい室温になれるまで待とう。楽器を体にくっつけたり、手で包んだりして温めるのも有効。

暖房から遠ざける

金管楽器の管体は、気温や湿度によるダメージは比較的少ないが、暖房器具の影響でグリスが乾燥することもある。楽器は暖房器具の近くに置いておくこととさまざまな不具合が生じる可能性があるので気をつけよう。

金管楽器

定期的に風を通す

ケースの内側は湿度が高く、夏場はカビが発生しやすくなる。演奏後、ケースにしまうときは、楽器の水分をよく拭き取ってから、しばらく使っていない楽器も、ときどきケースを開けて風を通すようにしよう。



なかなか見る機会の少ないレアなFGギターがずらりと並ぶ。

ギターを弾いてあげることが いちばんのメンテナンス

INTERVIEW ミサイル濱野（FG愛好会主宰）

ヤマハのFGシリーズに魅せられたことから、アコースティックギターのコレクターになり、百本を超えるギターとともに暮らすミサイル濱野さん。リペアの修業を経て、ギターの専門店を営んでいる濱野さんだが、膨大なコレクションとはどう向き合っているのだろうか。現地を訪ねて見せてもらったのは、ヴィンテージものから最新までのFGシリーズコレクションと日々欠かさないメンテナンス作業はもろんのこと、何よりも、FGシリーズをみんなに知ってほしいという、あふれんばかりのギター愛だった。

text by Kenichi Iijima photos by Takako Miyachi



たまたま見つけた
赤ラベルに
ノックアウトされる

ヤマハのFGシリーズといえば、一九六六年に登場して以来、世界中のギターファンに愛され続けてきた日本産フォークギターとして有名。そのFGシリーズを百本以上コレクションする強者がいると聞いて、世界遺産・姫路城のある兵庫県姫路市に向かった。

取材陣を出迎えてくれたのは「Yamaha Folk guitar FG愛好会」を主宰するミサイル濱野こと濱野景一さん。さっそくギターを保管している自宅にあらせてもらうと、マニア垂涎のお宝ギターがズラリ！フォークギターの名機「FG180」の試作品と言われる「F110」

や、クラシック・ギターにスチール弦（通常はナイロン弦）を張った「Dynamic GUITAR」ボディからネックまですべて竹でできている「FG・B1N」など、専門ショップでもめったにお目にかかれない貴重なものばかりだ。

濱野さんがこれほどまでにヤマハのフォークギターに魅了されるようになったきっかけは、通称「赤ラベル」と呼ばれる「FG180」との出会いだったという。

「姉の結婚式の余興のために初心者向けのFシリーズを買ったのが最初です。そのうち路上ライブをするようになってワンランク上のLLシリーズを買ったりもしたんですが、知識もなかったで、そこまで音にこだわりはなかったんです。ところが『丸ごと一冊YAMAHA FG』という本に出会い、そこに載っていたFG180が気になって。大阪のヴィンテージショップでたまたま見つけたのをジャラ〜ンって弾いたら、中古だったんですけど『こんなエエ音するんや!』と、思わずローン組んで買ってしまいました。そこから本に載っているほかの機種も気になって集めだして。いまでは

ピアノ調律のお仕事拝見

text by Kazumi Setzawa photos by Yusuke Abe

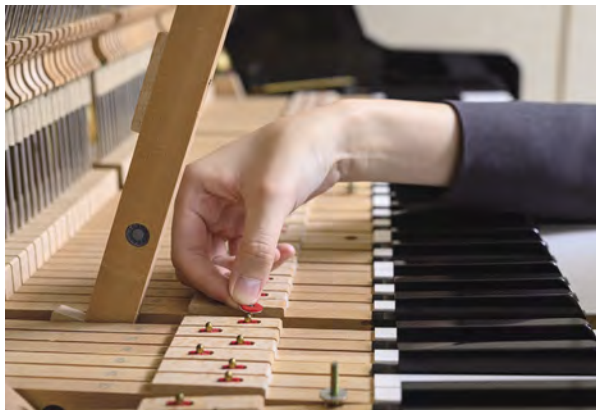
いい音で、毎日を



ピアノの定期的なメンテナンスには、専門家による調律が欠かせない。
では、ピアノの調律はどのように行われるのだろうか。そこで、調律師の篠本知花さん（ヤマハミュージックジャパンカスタマーサポート部ピアノ技術サービス課）に実際に、アップライトピアノの調律を行いながら、手順や工程を解説していただいた。すると、実に多岐にわたる調律の仕事の全容が見えてきた。

部屋に入った瞬間から 仕事は始まる

ピアノの調律というと、真っ先にイメージするのは上の写真のような場面だろう。しかし、ここに至るまでにはいくつものステップがある。調律師がまず行うこと。それは篠本さんによると「ピアノの置かれている環境を見きわめること」だという。「ピアノは温度と湿度の変化に大きな影響を受けます。ですから、お部屋の広さや日当たり、温度や湿度の状態、エアコンの位置など、ピアノを取りま



このように鍵盤を上げ、バランスパンチングペーパー（ドーナツ形の薄く小さな紙）を使って、鍵盤の高さを調整する。木、紙、フェルト、といった素材が使われていることから、温度・湿度の影響の大きさがわかる。



弦のチューニングは、ロングウエッジ（右の写真の赤いフェルト）を挟み込むことからスタートする。1音につき3本ある弦の、左右の弦を消音するための作業。



ペダルがスムーズに効かないといった違和感があるときは、上の写真のようにして調整を行う。ペダルもまた、温度や湿度の影響によって繊細に変化しているパーツのひとつだ。

鍵盤タッチ、ペダルなどの チェックと調整

く環境に、まず目を配ります」
エアコンがピアノの近くに設置されている場合は、風が直接当たらないよう、風向きのアドバイスをすることももあるそうだ。
そして次にピアノの診断。低音から高音まで、全音域を鳴らし、鍵盤やペダルの動き、音の状態、雑音などの有無をチェックする。その結果をもとに、どんな調整を行うかの見通しを立てる。
それが終わると、慎重に外装を取り外す。ふだんは見ることのできないピアノの心臓部が現れると、その美しさと迫力に圧倒される。

鍵盤タッチやペダルなどは、いずれも温度・湿度によって、つねに状態が変化しているのだという。音だけでなく、楽器全体のコンディションをバランスよく整えていくのが調律師の仕事。そのいくつかの作業を、具体的に見てみよう。

ペダルや鍵盤の状態は、演奏者の弾き心地に大きくかわってくる。ペダルは、奥にある蝶ねじを回し

すべての弦を順に チューニングしていく

続いて弦のチューニングを見てみよう。まずは、ロングウエッジを弦の間に挟み込む（写真右下）。これは、一音に三本ある弦（低音域では二本、あるいは一本）のうち、左右二本の弦を消音して、中央の弦だけを鳴らすための作業。はじめに中央の弦からチューニングしていく。

最初に基準となるラ（鍵盤の真ん中のラ）を、音叉やチューナーを使って四百四十二ヘルツなどに合わせ